

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XLIII)

竹 下 春 日

[XXI] 20 眞の幸福——37, 40, 301, 302, 303 (19),
305 (19), 306 (51), 725, 726 (15).

(1) La. 37-Br. 442について。——《人間の本性の眞の姿、人間の眞の幸福、眞の徳、眞の宗教といったものは、別々に切りはなして知ることができない。》(La vraie nature de l'homme, son vrai bien, et la vraie vertu, et la vraie religion, sont choses dont la connaissance est inséparable.)

この断章中には、《彼の〔人間の〕眞の幸福》(son vrai bien) という表現があるので、一応「20 眞の幸福」の項目中に分類しうる。

(2) La. 40-Br. 74について。——《人間的知識や哲学の愚かさについて》の手紙。／この手紙を「気ばらし」の前に。／「……できた人は、さいわいである。」〔原語はラテン語〕／「何ものにも驚かないことこそ……」〔同上〕／モンテーニュにある二百八十種類の最高の幸福。》(Une lettre de la science humaine et de la philosophie. / Cette lettre avant la divertissement. / Felix qui potuit... / Felix nihil admirai. / Deux cent quatre-vingts sortes de souverains biens dans Montaigne.)

この断章のうちにも、《最高の幸福》(desouverains biens) なる語がある。したがってこのfr.も、前断章と同様、20の「眞の幸福」中に分類しうる。

(3) La. 301-Br. 426 について。——《眞の自然が失われたので、何もかもが人間にとっては自然になった。ちょうど、眞の幸福が失われたので、何もかもが人間の眞の幸福になったように。》(La vraie nature étant perdue, tout devient sa nature; comme, le véritable bien étant perdu, tout devient son véritable bien.)

このfr.のうちには、《véritable bien》という語が、二個所出て来るので、20の「眞の幸福」のうちに分類しうることは、言う迄もない。

(4) La. 302-Br. 544について。——《キリスト者の神は、ご自身こそ、何ものにもかえがたい幸福であることをたましいにひしと感ぜしめたもう神である。たましいの安らぎはただご自身の中にのみあり、ご自身を愛しまつることのほかに自分のよろこびはないことを、ひしと感ぜしめたもう神である。また、それ同時に、たましいを引きとどめ、力をつくしてご自身を愛そうとするのをはばむじゃま物を、深く嫌悪させたもう神である。たましいを押しとどめる自愛心と欲情とは、神には到底忍びたもうことができないものである。この神は、たましいには、自分を破滅させる自愛心の根がひそんでいること、ご自身のみがたましいを癒したもう力を持たれることをひしと感ぜしめたもう。》(Le Dieu des chrétiens est un Dieu qui fait sentir à l'âme qu'il est son unique bien; que tout son repos est en lui, qu'elle n'aura de joie qu'à l'aimer; et qui lui fait en même temps abhorer les obsfacles qui la retiennent et l'empêchent d'aimer Dieu de toutes ses forces. L'amour-propre et la concupisceuce, qui l'arrêtent, lui sont isupportables. Ce Dieu lui fait sentir qu'elle a ce fonds d'amour-propre qui la perd, et que lui seul la peut quérir.)

この断章は、《何ものにもかえがたい幸福》(unique bien) と《神》(le Dieu) との関係を叙している。したがって、「20 眞の幸福」中に分類すべきものである。

(5) La. 303 (19) -Br. 74 bisについて。——〈哲学者たちにとっては、二百八十もの最高の幸福。〉 (Pour les philosophes, deux cent quatre-vingt souverains biens.)

このfr.も「20 眞の幸福」の分類項目に入るべきものであるのは、断章中に〈最高の幸福〉 (souverains biens) が、叙べられているからである。

(6) La. 305 (19) -Br. 462について。——〈眞の幸福の探究——ふつう一般の人々は幸福が、財産とか外面的な仕合わせとかあるように思っている。あるいは、せいぜい、気ばらしに幸福があるように思っている。哲学者たちは、そういうことがみな、空しいことであると教え、われらがめいめい幸福のありそうに思った所に幸福があるとした。〉 (Recherche du vrai bien. —La commun des hommes met le bien dans la fortune et dans les biens du dehors, ou au moins dans le divertissement. Les philosophes ont montré la vanité de tout cela et l'ont mis où ils ont pu.)

この断章の冒頭には、〈眞の幸福の探究〉とあるので、20の「眞の幸福」中に分類しうることは、論を俟たないが、なお〈哲学者たち〉 (les philosophes) の所説にも触れているので、19の「哲学者たちの考え」のうちにも、分類しうることを考慮しなければならない。

(7) La. 306 (51) -Br. 422について。——〈眞の幸福を求めて、かなえられず、くたくたに疲れきるのはよいことである。そうしてこそ、救い主に手をさしのべるようになるのだから。〉 (Il est bon d'être lessé et fatigué par l'inutile recherche du vrai bien, afin de rendre les bras au Libérateur.)

〈眞の幸福〉 (le vrai bien) を求めて、……」の叙述に徴して、この断章は「20 眞の幸福」中に分類しうる。

(8) La. 725-Br. 264について。——〈人は、毎日食べたり、眠ったりするのは、少しも飽きることがない。なぜなら、飢えはまた新たに起こってくる

し、ねむ気もそうだからである。そうでないとしたら、飽きあきしてしまうであろう。同じように、霊的な事柄についても、飢えがなければ、飽きてしまう。義に飢えること。八番目の浄福。》(On ne s'ennuie point de manger et dormir tous les jours, car la faim renaît, et le sommeil; sans cela on s'en ennuerait. Ainsi, sans la faim des choses spirituelles, on s'ennuie. Faim de la justice: béatitude huitième.)

このfr.は、20の「眞の幸福」のうちに配属すべき性質のものである。なぜなら、この断章中の最後には、〈八番目の浄福〉(béatitude huitième)——「マタイ伝」5章10節の「第八の幸福」(幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。)が引用されているので、20の分類項目中に入る。

(9) La. 726 (15) -Br. 542について。——〈人間を、同時に「愛すべき・幸福な者」にするのは、ただキリスト教だけである。「君子の道」においては、同時に愛すべき者、幸福な者であることはできない。〉(Il n'y a que la religion chrétienne qui rende l'homme aimable et heureux tout ensemble. Dans l'honnêteté, on ne peut être aimable et heureux ensemble.)

この断章中には、〈「君子の道」〉(l'honnêteté)という語が出ているが、これはパスカル時代の文化人たちの理想としたあり方であり、したがって当時の人々は〈honnête homme〉という理想像を志向していたのである。しかしパスカルは、キリスト教の立場から、この理想像を批判して、この像を体現する人物でも、〈同時に愛すべき者、幸福な者であることはできない〉(on ne peut être aimable et heureux ensemble)と、したのである。パスカルの眞意は、愛すべき者にして且つ倅せなる者たりうるのは、実に眞のキリスト者のみであると、いうにある。したがってこの断章は、20の「眞の幸福」のうちに入れることが出来ると、言えよう。

[XXII] 21 人間の無知——13, 312, 316, 325.

(1) La. 13-Br. 229について。——〈なるほど、わたしにもそんなふうに見える。だが、それが悩みの種なのだ。わたしはあちこちを眺めまわす。だが、どこにも暗黒だけしか見えないのだ。自然がわたしに与えてくれるもので、疑惑と不安の材料にならないものは何一つない。もし自然の中に神のみ姿を示すものが一つも見えないならば、わたしは否定の側についたであろう。もし創造者のしるしがどこにでも見えるなら、わたしは安らかに信仰のなかに落ち着くことができたであろう。しかし、否定するには余りにも多くのものが見えるし、確信するには見えるものが余りにも少ないので、わたしはあわれな状態におかれている。このような状態にあって、わたしは何度心に願ったことであろうか。自然が神に支えられているのなら、そのみ姿をありありとあらわしてくれればいいのか。自然が示す神のしるしがいつわりのものならば、いっそ、すっかりそんなしるしは消し去ってくれればいいのか。どっちの側につけばいいのか、このわたしにもよくわかるように、自然が、何もかも語ってくれるか、さもなければ何も語ってくれなければいいのか。けれども、今こうしてわたしのおかれている状態においては、自分が何者なのか、自分は何をすべきかも知らない始末なのだから、自分の状況も義務もわかってはいない。わたしの心は、眞のさいわいにあずかろうとして、それはどこにあるのかを知ろうとひたすら求めている。永遠を手に入れるためなら、どんなものでも、わたしには高すぎるというものはないのだ。／信仰を持ちながらも、こんなふうにおざなりな生き方をしている人々、せっかくの賜物を十分よく利用していない人々を見ると、わたしはうらやましいと思う位だ。わたしなら、その賜物を、もっとちがったふうに使いただろうに。〉 (Voilà ce qui je vois et ce que me trouble. Je regarde de toutes parts, et je ne vois partout qu'obscurité. La nature ne m'offre rien qui ne soit matière de doute et d'inquiétude. Si je n'y voyais rien qui marquât une Divinité, je me déterminerais à la négative; si je voyais partout les marques d'un Créateur, je reposerais en paix dans la foi. Mais, voyant trop

pour nier et trop peu pour m'assurer, je suis dans un état à plaindre, où j'ai souhaité cent fois que, si un Dieu la soutient, elle le marquât sans équivoque ; et que, si les marques qu'elle en donne sont trompeuses, elle les supprimât tout à fait; qu'elle dît tout ou rien, afin que je visse quel parti je dois suivre. Au lieu qu'en l'état où je suis, ignorant ce que je suis et ce que je dois faire, je ne connais ni ma condition, ni mon devoir. Mon coeur tend tout entier à connaître où est le vrai bien, pour le suivre; rien ne me serait trop cher pour l'éternité. / Je porte envie à ceux que je vois dans la foi vivre avec tant de négligence, et qui usent si mal d'un don duquel il me semble que je ferais un usage si différent.)

この可成な長断章は、自己存在の無知と惨めさについて、痛切なる嘆きを吐露している。——〈……、否定するには余りにも多くのものが見えるし、確信するには見えるものが余りにも少ないので、わたしはあわれな状態におかれている。〉（……、voyant trop pour nier et trop peu pour m'assurer, je suis dans un état à plaindre,）；〈けれども、今こうしてわたしのおかれている状態においては、自分が何者なのか、自分は何をすべきかも知らない始末なのだから、自分の状況も義務もわかっていない。〉（Au lieu qu'en l'état où je suis, ignorant ce que je suis et ce que je dois faire, je ne connais ni ma condition,）

かように引用文は、限界状況に直面した人間存在の自己を物語っているので、このfr.は21の「人間の無知」の分類項目に所属するものと、判定することが出来る。

(2) La. 312-Br. 427について。——〈人間は、自分がどのような地位に置かれるべきものかを知らない。人間は明らかに迷っており、自分の正しい場所から転落して、それをふたたび見つけ出すことができずにいる。人間は、見通しもきかないやみの中で、不安そうに、あちこちそれをたずね歩いているが、失敗にばかり終わっている。〉（L'homme ne sait à quel rang se

mettre. Il est visiblement égaré, et tombé de son vrai lieu sans le pouvoir retrouver. Il le cherche partout avec inquiétude et sans succès dans les ténèbres impénétrables.)

この断章も前断章と同様、人間存在の本来的あり方から転落した頹落的実存としての非本来的実存の無自覚性に触れておるので、「21 人間の無知」に入る。

(3) La, 316-Br. 558について。——〈わたしたちは、自分を取りまくこの暗さから、自分の無価値よりほかに何を結論できるであろうか。〉 (Que conclurons-nous de toutes nos obscurités, sinon notre indignité?)

この断章中には、〈自分を取りまくこの暗さ〉 (toutes nos obscurités)、〈自分の無価値〉 (notre indignité) という暗愚としての無自覚・無価値を、テーマとしているので、分類項目の21に属する。

(4) La, 325-Br. 230について。——〈神が存在するということはわからないし、神が存在しないということもわからない。たましいが肉体とともにあるということもわからないし、わたしたちにはたましいがないということもわからない。この世界が創造されたものであるということもわからないし、この世界は創造されたものでないということもわからない。原罪があるということもわからないし、原罪はないということもわからない。〉 (Incompréhensible que Dieu soit, et incompréhensible qu'il ne soit pas ; que l'âme soit avec le corps, que nous n'ayons pas d'âme; que le monde soit créé, qu'il ne le soit pas, etc; que le péché originel soit, et qu'il ne soit pas.)

この断章は、神・魂・世界の被造性・原罪の有無にかんする不可知について叙している。それゆえ21の「人間の無知」の項目中に分類しうる。

[XXIII] 22 明るさと暗さ——317 (14), 321, 324, 452 (15), 735 (36・43・45・50), 452 (15), 735 (36・43・45・50), 736 (35・36・

(1) La, 317 (14) -Br, 586について。——〈もし暗さがなかったら、人間は自分の墮落に気がつかなかつたであろう。もし光がなかったら、人間は救いの希望をいだかなかつたであろう。だから、神がなければ隠され、なかばあらわれていたもうことは、当然そうあっていいことであるばかりか、わたしたちにとって有益なことである。というのも自分の惨めさを知らずに神を知ること、神を知らずに自分の惨めさを知らずとも、どちらも人間にとっては同じ危険なことだからである。〉 (S'il n'y avait point d'obscurité, l'homme ne sentirait point sa corruption; s'il n'y avait point de lumière. l'homme n'espérerait point de remède. Ainsi, il est non seulement juste, mais utile pour nous que Dieu soit caché en partie, et découvert en partie, puisqu'il est également dangereux à l'homme de connaître Dieu sans connaître sa misère, et de connaître sa misère sans connaître Dieu).

この断章は、精神的〈暗さ〉 (obscurité) と、これに対立する〈光〉 (lumière) としたの〈救い〉 (remède) をテーマにしているので、分類項目の「22 明るさと暗さ」に属する。

(2) La, 321-Br. 575について。——〈選ばれた者にとっては、何もかもがさいわいに転じる。聖書の判りにくさでさえ、そうなる。つまり、選ばれた者は、神の光の明るさに照らされてみて、その判りにくさも尊いものと思うからである。ところが、その他の人々にとっては、何もかもがわざわいに転じる。明快な点までが、そうなる。つまり、かれらは自分に理解できない不明な点があると、明快な点まで冒瀆するからである。〉 (Tout tourne en bien pour les élus, jusqu'aux obscurités de l'Écriture; car ils les honorent, à cause des clartés divines. Et tout tourne in mal pour les autres, jusqu'aux clartés; car ils les blasphèment, à cause des obscurités qu'ils n'entendent pas.)

この断章のうちには、〈選ばれた者〉 (les élus) にとっての〈明るさ〉 (clartés) と、〈その他の人々〉 (les autres) にとっての〈不明な点〉 (obscurités) とが、対比的に述べられているので、このfr.は22の「明るさと暗さ」に配分される。

(3) La. 324-Br. 857について。——〈明るさ、暗さ——もし眞理が目に見えるしるしを持っていなかったならば、暗さがあまりにもひどかったであろう。眞理が、一つの「教会」、見える集会の中につねに存在してきたということは、その驚くべきしるしの一つである。もしこの「教会」の中に、ただ一つの考えだけしかなかったとしたら、あまりにも明るさがありすぎることになったであろう。教会の中につねに存在してきたものは、眞実である。眞実だけが、つねにそこにあった。そして、眞実でないものは、何一つそこではつねに存在することがなかった。〉 (Clarté, obscurité.—Il y aurait trop d'obscurité, si la vérité n'avait pas des marques visibles. C'en est une admirable, d'être toujours dans une Eglise et assemblée visible . Il y aurait trop de clarté s'il n'y avait qu'un sentiment dans cette Eglise; celui qui y a toujours été est le vrai, car le vrai y toujours été, et aucun faux n'y a toujours été.)

この断章の冒頭は、〈明るさ、暗さ〉 (Clarté, obscurité) となっているので、当然このfr.は、22の「明るさと暗さ」の項目に所属する。

(4) La. 452 (15) -Br. 565について。——〈だから、この宗教の暗さそのものの中に、この宗教についてわたしたちがほんの少ししか光をもっていないことの中に、この宗教を知ろうとするのにわたしたちがまるで無関心であることの中に、この宗教の眞理を見てとるがよい。〉 (Reconnaissez donc la vérité de la religion dans l'obscurité même de la religion, dans le peu de lumière que nous en avons, dans l'indifférence que nous avons de la connaître.)

この文中には、《この宗教の暗さそのもの》(l'obscurité même) 及び、われわれが、キリスト教に対して《わづかな光》(un peu de lumière) を持つにすぎないことが述べられ、《obscurité》と《lumière》が対立して現われているので、このfr.は分類項目の22に入ると、言い得る。

(5) La. 735-Br. 847について。——《クリスマスの晩課の交誦の一つに、/「光は正しい者のために暗黒の中にもあらわれる」。(Une des antiennes des vêpres de Noël:/ *Exortum est in tenebris lumen rectis corde.*)

(6) La. 736 (35・36・43・45・50) -Br. 564——《預言や奇跡にしてもそうだが、わたしたちの宗教のさまざまな証拠は、完全な説得力をもつと言えるような性質のものではない。しかし、なんの理由もなく、それらを信じるべきだと言われるような種類のものでもない。このように、ここには、ある人たちを照らし出し、他の人たちを暗くする、明るさと暗さがある。ところで、その明るさは、その反対のものの明るさを超えたものであるか、少なくともこれと同じぐらいのものである。だから、理性がこの明るさにしたがわかない決心をさせるはずはない。とすれば、この世の欲情とよこしまな心のほかにはありえない。こんなふうにして罪を宣告するには十分な明るさがあるが、説得するには十分ではない。それは、この明るさにしたがおうとする人々に、自分たちをしたがわせるものが、恵みであって理性ではないことを示すためであり、これを避けようとする人々に、自分たちをさげさせるのは、欲情であって理性ではないことを示すためである。「ほんとうの弟子、ほんとうのイスラエル、ほんとうに自由な者、まことのパン」。(Les prophéties, les miracles mêmes et les preuves de notre religion ne sont pas de telle nature qu'on puisse dire qu'ils sont absolument convaincants. Mais ils le sont aussi de telle sorte qu'on ne peut dire que ce soit être sans raison que de les croire, Ainsi il y a de l'évidence et de l'obscurité, pour éclairer les uns et obscurcir les autres. Mais l'évidence est telle, qu'elle surpasse,

ou égale pour le moins, l'évidence du contraire; de sorte que ce n'est pas la raison qui puisse déterminer à ne pas la suivre, et ainsi ce ne peut être que la concupiscence et la malice du coeur. Et par ce moyen il y a assez d'évidence pour condamner et non assez pour convaincre; afin qu'il paraisse qu'en ceux qui la suivent, c'est la grâce, et non la raison, qui fait suivre; et qu'en ceux qui la fuient, c'est la concupiscence, et non la raison, qui fait fuir. / *Vere discipuli, vere Israelita, vere liberi, vere cibus.*)

この断章のテーマは、〈わたくしたちの宗教のさまざまな証拠〉 (les preuves de notre religion) のもたらす〈明るさと暗さ〉 (de l'évidence et de l'obscurité) を中心とするものであるから、22の「明るさと暗さ」の分類項目中に配分すべきものである。